

2020 年度 前期

# 個別学力検査

## 国 語

### 注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 問題冊子は 24 ページあります。解答冊子には解答用紙 5 枚が綴じられています。
3. 試験時間は 90 分間です。
4. すべての解答用紙の所定の欄に受験番号を記入してください(氏名は記入しないでください)。
5. 問題冊子と解答冊子に印刷不鮮明や落丁などがある場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
6. 試験中に気分が悪くなったときは、手を挙げて監督者の指示に従ってください。
7. 問題冊子は試験終了後に持ち帰ってください。ただし、無断で複写、複製、転載などを行うことはできません。

個別学力検査

国

語

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

国語の解答はすべて解答用紙に書くこと。

## 第一節

世界に対する対処の仕方は、三つに大別されるでしょう。人工知能の対処の仕方、天然知能の対処の仕方です。これを、身近な虫や魚に対する向き合い方において考えてみます。

第一に、人工知能です。食べるためとか、害虫として駆除するとか、自分にとっての用途、評価が明確に規定され、その上で対処するという向き合い方が、人工知能の対処に相当します。それは一昔前の日本ではよく見られた風景の一部であり、むしろ動物的な気さえして、未来的な人工知能とはソリが合わないようにも思えます。しかし私はこれを、人工知能の思考様式に対応させたいと思います。

あ それは、自分にとって有益か有害かを決め、その評価のみで自分の世界に帰属させるか（食べて取り込む、益虫として利用するか）、有害なものとして排除するか（有毒なものを無視する、害虫として駆除するか）、いずれかに決め、自分にとっての世界を広げるものだからです。

第二に、自然知能です。ここでは、自然科学が規定する知能という意味で、自然知能という言葉を使います。自然知能という言葉の方は、様々ありますが、本書で言う自然知能とは、自然科学的思考一般の事です。昆虫少年の思考様式が、自然知能の対処の典型となります。自然知能に従う昆虫少年は、世界を理解するために、博物学的、分類学的興味から虫や魚に対処していきま

す。学名は無理としても、正式な和名を覚え、捕虫網を持って昆虫採集し、ドクピンで虫を殺して標本を作る。こうして世界に対する知識を蓄積していく。これが自然知能です。

第三に天然知能です。第一の人工知能が「自分にとっての」知識世界を構築する対処、第二の自然知能が「世界にとっての」知識世界を構築する対処であったのに対し、天然知能はただ世界を、受け容れるだけです。誰にとってのものでもなく、知識ですら

ない。或る場合には評価をすることがあっても、別の場合には一切無意味であるものも受け容れる。評価軸が定まっておらず、場当たりの、恣意的で、その都度知覚したり、知覚しなかったり。これが天然知能です。

(A) 子供の頃、ドブ川でナマズを捕っていた私は、天然知能でした。近所には里山が広がり、草深い土手に区切られた用水路で、フナやドジョウを捕っていた私は、食べるためでも、博物学的興味からでもなく、ただ魚を捕り、しばらく飼っては、近くの沼に逃しに行っていました。その地方では梅雨の終わりに大雨が降り、近隣の沼に棲息する大型のナマズ、ライギョ、五十センチにはなるだろう、コイが、近所の、江戸時代に作られた堀に流されてきました。

大雨の翌日は決まって快晴で、水の引いた堀の淀みに、ナマズやコイが、背びれを見せながら潜んでいました。それを小さなタモ網で掬い上げることの無上の喜び。堀の上から冷やかす大人の声も気にせず、当時は自転車さえ捨てられていた堀の中で、ただ魚を捕り続けました。帰宅するとタライに魚を放し、その背中をひたすら眺めました。

自然知能は、博物学的に魚を同定しようとはまずから、ナマズやコイのイメージは常に図鑑に示されたような、横から見たイメージになります。人工知能では、自らの経験が作り出した用途でイメージが決まります。食べ物として利用するとき、ナマズやコイは三枚おろしや切り身であり、インテリアとして利用するときには、スイソウの中で水草と一体になったイメージとなり、その都度、それ以上でもそれ以下でもないイメージが確定します。

天然知能が見るナマズやコイのイメージは、水面から見る影であり背中です。それは常に上から見た黒々とした流線型で、奥の暗がりからフツと現れ、また奥へと消えて行つては、天然知能を興奮させます。天然知能は、自分には見えない暗がり、どうなっているのかわかるはずもない向こう側からやつてくるもの、向こう側へ行くものに興奮するのです。魚が向こう側との接点であるとき、自然の中で生きている姿を見るしかない。

向こう側は、他人に聞いても誰にもわかりません。客観的に意味のないものです。だから自然知能は無視します。自然知能は、問題やナゾとして知覚されたものだけに興奮するのです。人工知能は、知覚できたデータだけを問題にしますから、まずは

データを見せてくれ、と言うでしょう。見えないものに興奮するのは、天然知能だけの特権なのです。

(注) マメコガネに対して三つの知能はどう反応するでしょうか。人工知能は、この甲虫がマメやブドウに対する害虫となり得るものの、日本では海外ほど暴走しない、だから自分の畑もさほど荒らさない、その程度の害虫と判断するでしょう。もちろん、それは一つの人工知能の判断で、別の経験を持った人工知能は、別の判断をするはずで、色の綺麗きれいなものは何でも収集する人工知能なら、マメコガネの羽を自分のコレクションに収めるべき、と判断するでしょう。人工知能に共通するのは、自らの経験によつてキタキタえあげられた一元的価値観で、全ての知覚されたものを評価するという点です。それは一般的には、自らにとつて有益か有害か、という判断に帰着すると考えていいでしょう。

自然知能は、目の前の甲虫がマメコガネであることの確認にヤツヤツキになるでしょう。腹部を覆う羽は茶色でメタリックグリーンに縁取られています。頭部と胸部も緑色。腹は焦げ茶色ですが白い毛がたくさん生えています。こういった分類上の基準を満たすか否かで、マメコガネか否か判定されます。目の前の甲虫がマメコガネであったなら、世界に関する知識は再確認されますが、そうでない場合、新種の可能性さえ出てくる。こうしてマメコガネは、世界にとつての知識に寄与する材料となるのです。

天然知能は、目の前の甲虫を見て、知識としてマメコガネかもしれないと思いつつながら、マメコガネが、自分の知らないところからやってきた点に興奮します。マメコガネは、自分の知らないことを担いできたに違いない。天然知能は、マメコガネと自分の出会いの中に、自分の知らない向こう側から、何かがやってくることを感じるのです。

## 第二節

世界の真理としての自然知能、個の経験にイイキキョョした素早い判断である人工知能。これらに対して、天然知能には、「てんねん」という音の感じからも、論理的ではない、ググチチヨヨククな感じがありますが、しかし同時に、底抜けに明るい、楽天的な、生き

ることへの無条件の肯定が感じられます。論理的に評価し、判断する能力としては、低いかもしれない。しかし本書では、天然知能だけが、自分で見ることでできない向こう側、徹底した自分にとっての外側、を受け容れる知性であり、創造を楽しむことができる知性である、ということを示していきます。結果、天然知能は、自分が自分らしくあることを、肯定できる、唯一の知性なのです。

人工知能や自然知能には創造性がなく、天然知能だけが創造性を持つのです。なぜそう言えるのでしょうか。人工知能や自然知能は、知覚したものだけを自分の世界に取り込み、知覚できないものの存在を許容できません。そこには外部を取り込み、世界を刷新する能力がないのです。天然知能は、知覚できないものの存在を感じ、それを取り込もうと待ち構えている。この意味で天然知能は、自らの世界の成立基盤を変えてしまうのです。

人工知能と人間に、何か題材を決めて絵画を制作させ、一般にアンケートを取ってどちらがいいか選んでもらう。このようにして、創造性を評価しようものなら、人工知能はたちどころに、一般の人がいいと感じる絵画の傾向を学習し、それをもって、アンケート調査で勝つ限りでの、人間が描いたよりずっと「創造的な」絵画を描けるでしょう。優劣は、優劣の基準を決めない限り、存在しないのです。逆に決めたが最後、人工知能の一人勝ちです。

このような創造性は、外部から勝手に評価基準を与えた、擬似的創造性に過ぎません。当事者にとっては何の意味もない。多くの人が投票によって「創造的」と考える作品は、それを制作した当事者にとって、創造的ではないのです。人工知能や自然知能は、だから、創造性を楽しむことができない。

天然知能だけが、「創造を楽しむ」ことができるのです。だからこそ、天然知能は、自分が自分らしくあることを、肯定できるのです。ちょっと説明しましょう。

創造とは、今までなかったものを創ることです。別にあなたはアーティストでもないだろうし、創造なんて、と思うかもしれ

ません。しかし、ただ毎日生きるだけでも、創造です。今までなかったあなたが、一瞬ごと、時々刻々と、創られるわけですから。

あなたは、創るということに対して、アーティストを思い浮かべ、「何かを創るなんてことは、そういうイメージを持っているアーティストだけの仕事だろう」と思ったかもしれません。しかし、アーティストの頭の中にイメージが存在するとき、それは既に存在するものになってしまいます。自分の内なるイメージを外に出して形にするだけなら、それは創造ではありません。なかつたものを創るとは、自分の知らない向こう側からやってくることを待つしかないのです。

自分からは感じることもできない、自分の知らない向こう側、これを外部と言うことにします。創造とは、外部からやってくるものを受け容れること、なのです。アーティストがイメージするものは、外部からやってくるものが降臨する場所、やってくるきつかけに過ぎない。アーティストとは、<sup>(iii)</sup>平凡な私たちよりほんの少し、外部への感度がいいだけで、創造についてやっていることは同じ、外部を受け容れること、なのです。

その意味で、日々の食事も創造です。私は、インスタントの、袋麺の焼きそばが大変好きです。先日まで、調理方法の説明に従って、時間通りに麺をゆで、粉末のソースを混ぜて食べることが、美味しい食べ方だと思っていました。

日、間違つて早めに麺をザルにあげてしまい、まだ乾麺のチヂレ<sup>(iv)</sup>具合がほとんど残つたままの、アルデンテよりもつと硬い麺を、食べる羽目になりました。麺を噛んでみると、麺の断面が頭に浮かびます。半透明の表面の奥には、粉状の白い、麺の芯がある。歯で芯を感じた私は、噛むと同時にその断面の映像が頭に浮かんだのです。しかし、その粉状の真っ白い映像と食感とは、私に、小麦を感じさせたのです。こうして私は、ダイレクトに小麦を感じる、それまでにはなかつた焼きそばの味を創造できたのです。

羊肉の記憶にも、創造の思い出があります。それまでは羊は臭みがあるという一般の理解を受け容れ、香辛料の利いたタレで食べるものだと思っていました。ところが或る日、羊の匂いはメロンの香りだ、と確信してしまつたのです。自分でそう思い込

むというのではなく、メロンの香りが突然やってきた。こうして、それまで臭い消しの必要だった羊肉は、メロンの香気に包まれた最高の肉となったのです。

天然知能は、かくして、自らにとつての外部を受け容れるわけですが、そうすることが生きるために得たとか、ましてや人に強制されるとか、そういうことはありません。何が外部かは本人しかわからないわけですし、それを受け容れる時の感覚も当事者しかわからない。不味そうな生煮えの麺にソースがまぶされた焼きそばの美味しさは、「これは小麦のダイレクトな味だ」と確信した本人だけが知る味なのです。楽しめるか否かは、当事者にとつての問題で、表現の仕方の優劣とは無関係なのです。誰かに評価されることを目的にするわけでもなく、周りの目を気にすることもない。だから、自分にとつての外部を受け容れ続ける＝創造し続けることは、自分だけにおいて、自分自身として生きること、すなわち、自分らしく生きること、なのです。

自分らしく生きる者は、自分勝手に利己的な者でしょうか。

逆です。周囲を気にせず創造を楽しむ者だけが、他者を受け容れることができるのです。あなたが気にする周囲は、所詮、あなたが既に気づいている、あなたの内側の者にすぎない。周囲を気にし続けるあなたは、外部を感じることができず、自らの内側に留まっています。

創造は、外部を問題にするのです。だからこそ、周囲を気にせず、まるで孤立して、一人で勝手に創作しているように見える者だけが、知覚し得ない他者を、受け容れることができるのです。自分らしく生きる者だけが、外部に対して開かれるのです。

今まで私たちは、あまりに人工知能的知性を、人間に課し過ぎていたのではないのでしょうか。「知覚可能な全てを考慮して、総合的に判断する能力」、これのみを追いかけてきたのではないのでしょうか。しかし、もはやそういうことは人工知能に任せておけばいい。私たちにはもちろん、人工知能的な部分も、自然知能的な部分もあります。しかし、今はまさに天然知能を全面展開するときなのです。



人工知能の時代は、なにも私たち自身に、人工知能化することを強いているわけではない。しかし、

え

計算機や

人工知能は、人間の知性の機械化を目的としたのです。つまり人間は、自らを人工知能的知性だと思ってきたのです。だからこそ、私たち自身の能力を高めることが、自分たちの人工知能化に結びついてしまう。それは、<sup>(D)</sup>とんでもない誤解を引き起こすことになります。

とはいってもまだ、人工知能、自然知能、天然知能の違いはぼんやりしたものでしょう。そこで次に空間把握から出発して、三者がどのような判断をするか、ざつくりと眺め、三者の違いを明確<sup>(W)</sup>にしたいと思います。ここで理解の助けとなる概念が、一人称と三人称、そしてそのいずれでもない一・五人称です。

### 第三節

あなたは、小さな部屋と廊下が迷路のように錯綜<sup>さくそう</sup>した、一つの都市のようなサイズの、巨大雑居ビルで、出口を求め彷徨<sup>さまよ</sup>っているとしましよう。ドアを開けて或る部屋に入ってみる。そこは不規則な多角形の部屋で、壁は七面もあるでしょうか。部屋には乱雑に、机や椅子が積み重なっていて、見渡すこともままならない。壁の数が何面あるのか明確でないのは、そういった理由があるからです。果たしてあなたは、入口とは違う部屋の出口を見つけ、扉を開け外に出て、扉を閉める。あなたの視界は、先ほどは七面ほどだった部屋の中で閉じたものでしたが、今、目の前に広がっているのは、やや曲がついていく狭い廊下です。これを少し行くと突き当たりにまた扉がある。これを開け、入ってみると、今度は食料品の並ぶ部屋です。あなたはこれも通過して、さらに別の部屋に進んで行く。

第一に、この迷路のような状況で、あなたが自然知能を有しているとしまます。自然知能は、世界にとつて真なる知識を模索し、常に真なる知識に近いと思われる世界を手中にしています。例えば、あなたの、その時その時における部屋や廊下の位置は、絶えずGPSを用いて、世界全体の中に埋め込まれ、あなたは、常に現在位置を把握しながら歩くことになる。それが自然

知能の歩き方です。GPSによる位置情報が、世界にとつての真なる知識、ということになります。

世界全体という大局的知識があつて、そこから部分部分を理解し、位置を把握していくのですから、基本的に迷うことはありません。こうして自然知能を持ったあなたは、巨大雑居ビルの地図を自ら作り、出口にたどり着くことができるでしょう。しかし、それでも間違ふことがある。その雑居ビルは、実は、一部が吹き抜けになつていて、かつ天井の高さが一定していないのです。つまり一階を平面的に歩き回つてゐるつもりが、いつの間にか、階段を登ることなく二階に来てしまうことがあり得るので

す。絶えずGPSで自分の位置を把握していても、所詮平面に投影した位置に過ぎません。あなたは一階を歩き回り、元の位置に戻つてきたつもりが、全く違う風景を目にする。GPSが故障したかとも思うのですが、このようなことを何度か繰り返す時、初めて、このビルの特異な構造に気づくこともあるでしょう。こうして、自然知能を有するあなたは、常に地図の全体を理解しながら、全体それ自体を劇的に変えるような認識を、経験することになるのです。しかし自然知能では、地図を作るといふ目的が変わることはありません。「もうこの辺に住みつくから、地図なんていらぬ」といった質的転換はありません。

世界全体の、大局的知識に対する全幅の信頼があるからこそ、時として、局所的な不都合を見落としてしまうのです。不都合がかなり溜まつたところで初めて、グローバルな知識の不備に気づき、その時これを変更できる可能性がある、というわけですから、お、それができず、地図は破綻するかもしれません。自然知能ですら、そういう危うさを持っているのです。

自然知能は、世界に対する正しい知識という意味で、客観的知識を指向し、自分はそれを所持していると信じています。その意味で、その知性は、三人称的な、「わたし」や「あなた」といった主観的な経験を無化したものだと言えるでしょう。

そこで自然知能を、三人称的知性と言うことにします。

第二に、あなたが人工知能を有しているとしましょう。あなたは決して世界全体に対する知識、世界像を持っていません。あなたは、あなた自身の経験をつなぎ合わせて、雑居ビルの必要な地図を作り出し、それを用いて出口を探して行くのです。扉を

開け、ある部屋に入る。あなたは人工知能ですから、部屋の内部構造は、画像から速やかに計算し、正確に把握することができます。空間の全体に対する知識は持っていませんが、それを補って余りある速く正確な計算能力を持っているのです。

机や椅子に隠された壁の数も、隠れていない壁や、壁と壁の角度から、正確に把握することができます。その部屋の幾何学を把握し、部屋を出て扉を閉め、廊下に出る。人工知能であるあなたは、扉の面に直交するように部屋の外へ出、廊下の壁に遮られて壁沿いを歩く。この時、廊下の壁が、先ほどまでいた部屋の壁とどのような関係になっているか、簡単に計算できます。こうして、廊下は、先ほどまでいた部屋の壁に沿って延び、その延長線上にさらに延びていると判断されるのです。

人工知能は常に、現在目の前に広がる視界から得られた地理データと、以前の視界の地理データの関係を計算し、地図を拡張していきます。データとデータの関係を計算し、関係をもデータ化するのですから、絶えず、データの伸展、拡張だけが進められることとなります。かくして人工知能は、データの集まりとしてのみ、世界を把握するのです。

部分のデータは正確に測定されて得られ、データ間の関係も最適化されて得られます。だから、一階を緩やかな坂に従って歩いていると、いつの間にか二階になる、といった空間把握もお手のものです。自然知能のように、「世界全体に対する信頼を持っているが故に、局所的な不都合を見落とす」といったことは、人工知能にはないのです。絶えず、部分間の不都合を見出し、局所的に解決して、データの集まりとして世界を組み上げて行くのですから、一階と二階の特異な関係は、データの伸展、拡張だけで認識できるのです。

人工知能は、しかし知覚したデータだけから思考する計算するのです。この雑居ビルには特別な仕掛けがあつて、実は、部屋の一部が回転し、さつきまで繋がっていた部屋への道を消すことや、今までなかった隣のビルへ通じる扉さえ出現させることが可能なのです。それは、人工知能であるあなたの現在地ではない、見ている部屋や廊下ではない場所で、あなたが知覚していないところで、起こるのです。

こうして、人工知能もまた、自分が作成した地図に関する矛盾に苛まれることとなります。ただ自然知能と違って、GPSにおける自分の位置など、特権的に参照できる「全体」が、人工知能にはありません。地図上の矛盾は、想定される常識の範囲で解

消される努力がなされますから、ビルが回転することより、あなたは自分の誤り、計算間違いや、自分の誤作動を疑うでしょう。ひとたび、自らの過ちが、矛盾の原因と考えられるなら、矛盾解消のための推論自体が疑わしいものになります。人工知能であるあなたは、かくしてパニックに陥ることになるでしょう。それが外から見て暴走に見えるか、フリーズに見えるかはわかりませんが。

人工知能は、世界にとつての知識ではなく、自分自身にとつての生活世界・知識を構築するのです。

甲

それ

この意味で、人工知能を、一人称的知性と言うことにします。

#### 第四節

第三に、あなたが天然知能である場合について考えましょう。これは、一人称でも三人称でもない点が、理解の助けになります。そこで、一人称、三人称をエンヨウしながら議論を進めることにします。

やはり、あなたが七面の壁を持つ奇妙な部屋から出るところを考えてみます。廊下に出る以前、あなたの視界は七面体の部屋に限定され、その向こうは見えませんでした。この部屋を出て廊下に出た瞬間、あなたの視界は、少し曲がりながら延びた廊下に限定されます。視界が境界づけられるという事実は、この迷路のような雑居ビルに限定されるものではありません。あなたの視界は常に、何かに限定され、無限に広がっているわけではない。その限定されて孤立した複数の視界を、あなたは何らかの方法でつなげなければならないのです。

三人称的知性である自然知能は、全体という特権的知識、世界中の者が共有すること客観的とみなせる知識、を有することで、これを参照しながら、孤立した視界を貼り合わせる事ができた。いわば世界全体の白地図が用意されていて、あなたは自分のその都度の知識を、あなたの位置情報を頼りに、白地図に貼っていけばよかった。

一人称的知識である人工知能の場合、白地図はない。しかし限定された、その都度得られる視界に関するデータは完全で、そ

れを、他の既に知っているデータと関係づける計算も、論理的でかつ高速に実行されます。従って、壁の成す角度とあなたの歩行経路である正確なルートマップから、七面の部屋と廊下の位置関係は正確に割り出されてしまうのです。こうして異なるデータ間の関係が、またデータ化されるのです。

天然知能には、全体という知識はもちろんありませんし、ひとつひとつの部屋に関して、これをデータとして正確に計算することもできません。しかし、逆に、あまりにできないことが、自らの基盤への絶対的信頼を揺るがせ、自分の判断の外部を、呼び寄せることになるのです。自分の判断に自信がないから、常に「何か他にあるんじゃないかなあ」と思っているということですね。

「他に何かあるんじゃないか」という感覚は、余白であり、糊代のりしろとなります。七面の部屋と、その外にある廊下の位置関係について、「ほぼ部屋の壁に沿って廊下が配置されているようだ」という判断はできたとしみましょう。しかし天然知能は、「他に何かあるんじゃないか」という感覚を、七面の部屋と廊下の位置関係に、空間的な遊び、余白として設定することになります。この余白を糊代として、部屋と廊下の関係を糊付けしてしまえば、位置関係は固定されますが、天然知能はそうしない。糊代を関係の遊びとして、自由な可動領域として利用するのです。

(2) 異なる空間(七面の部屋と廊下)を、幅の広い糊代を使つて重ね、とりあえず配置するのです。とりあえずと言いましたが、いずれ正解が正しく把握されるか否かも覚束おぼつかない。逆に糊代を重ね、融通無碍ゆうつうむげに調整される、可動で、ダイナミックな地図が、ずっと維持される。だから、七面の部屋と廊下は、平行かもしれないし、直交しているかもしれないし、意外にも一階と二階に分かれているかもしれない。いちいち可能性をあげつらうのではなく、遊びの空間として設定する。それこそが、天然知能の地図なのです。

(3) 天然知能は、一・五人称的知性と言ふことができるでしょう。一・五人称とは、「あなた」に直面する「わたし」のことです。「あなた」自身ならそれは二人称ということになります。しかし、今問題にしているのは、あくまで、あなたと向き合っている

「わたし」なのです。わたしにとって、あなたとは何でしょう。「あなた」は、一人称の複数である「わたしたち」ではありません。わたしとあなたの間、何らかの相関などないのです。わたしとあなたの間、何らかの共同の場など一切ない。あるならそれは「わたしたち」に回収され、一人称に回収されます。

あなたは、わたしにとって想定外の何者かなのです。驚くべきことをするかもしれない。驚くべきこと、想定外であることは、何か行為がなされて初めて知覚されることですね。しかし、知覚された行為に対してその都度対処する、それだけなら、一人称も三人称も同じです。なぜ一・五人称なのか。

それは、想定外の何者か、予期し得ないことが待ち構えているかもしれないにもかかわらず、その「あなた」と対面しているということを意味します。つまり目の前のものに対し、まだ知覚されていないにもかかわらず、予期し得ない何かが存在するだろうことを受け容れ、待っているのです。それがわたしの「あなた」に対する態度なのです。これが一・五人称的知性です。従って一・五人称的知性とは、「知覚されないものに対しても、存在を許容する能力」、と定義できます。繰り返しますが、一人称や三人称は、知覚されないものなど問題にしません。主体と関係づけられるものだけを、問題とする。知覚以前は知ったことではないのです。

(郡司ペギオ幸夫『天然知能』をもとに作成)

(注) マメコガネ——コガネムシの一種。体長約一センチメートル。頭部と胸部は暗緑色で金属光沢があり、上ばねは黄褐色。幼虫は各種植物の根を食害し、成虫はマメ類・ブドウなどの葉を食う。

問題Ⅰ 次の問いに答えなさい。(配点20点)

問一 傍線部(ア)～(オ)の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

(ア) 所詮

(イ) 全幅

(ウ) 破綻

(エ) 苛まれる

(オ) 覚束ない

問二 傍線部(い)～(ぬ)のカタカナを漢字で書きなさい。

(い) ドク<sup>レ</sup>ピン

(ろ) スイソウ

(は) ナゾ

(に) キタエ

(ほ) ヤツキ

(へ) イキヨ

(と) グチヨク

(ち) チチレ

(り) エンヨウ

(ぬ) アクまで

問三 傍線部(i)～(v)の対義語を、それぞれの括弧内の漢字を使って書きなさい。

	(v)	(iv)	(iii)	(ii)	(i)
	共有	明確	確信	平凡	蓄積
〔	〔	〔	〔	〔	〔
単	柔	考	奇	累	消
無	味	険	凡	消	乏
有	暗	危	定	乏	落
狭	間	不	否	落	貯
門	未	変	粹	貯	欠
一	断	絶	拔	欠	耗
専	確	惧	百	耗	捨
応	曖	対	名	捨	〕
〕	〕	〕	〕	〕	〕



問題Ⅱ 次の問いに答えなさい。なお、論述形式の問いでは、句読点やかぎ括弧などの符号も一文字として扱うこと。(配点55点)

問一 空欄

あ

お

に入る最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つずつ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。なお、同じ選択肢を複数回選んではいけません。

- (1) もともと
- (2) もちろん
- (3) すなわち
- (4) なぜなら
- (5) ところが

問二 波線部(A)「子供の頃、ドブ川でナマズを捕っていた私は、天然知能でした。」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

- (1) ただ上から見るしかなかったナマズなどの魚をタモ網で掬い上げ、少しの間飼っては放すことに喜びを感じていた。すなわち、それまで知覚できなかった向こう側の風景を、知覚していることに興奮していたということ。
- (2) 食べるためではなく、ナマズなどの魚を捕り、それをしばらく飼い、近くの沼に逃がしに行くという目的のもと行動することを楽しんでいた。そして、自分には見えない暗がりへの興奮もそこに内在していたということ。
- (3) ナマズなどの魚は、図鑑などでは横から見たイメージだが、自然の中では上から見た流線型に見えるため、その違いに好奇心を強く感じていた。このように、通常見ることのできないものに心をたかぶらせていたということ。
- (4) たとえ周囲の大人には理解されなかったとしても、ナマズなどの魚が自然の中で生きている姿を見、それを捕り眺めることにただ喜びを覚えていた。そこには、自らが知覚できないものに対する強い感動があったということ。
- (5) 虫を採集し標本を作る昆虫少年のように、向こう側という知覚できない問題に魅了されていた。そのため、ドブ川でナマズなどの魚を捕り、捕ってきた魚をタライの中で眺めることに強くひかれていたということ。

問三 波線部(B)「人間が描いたよりずっと『創造的な』絵画を描ける」とある。それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1) 人工知能は、単に多くの人が創造的であると考えるものを描くに過ぎず、人間の知覚できる範囲内から出ていないため、本当の意味で創造的とは言えないということ。

(2) 人工知能は、一般の人が知覚することのできない外部からの評価基準に基づいて定められた、擬似的創造性しか持ち得ないということ。

(3) 人工知能は、人間以上に、一般の人が創造的であると評価する絵画を描くことができるため、創造性において人間よりも優れているということ。

(4) 人工知能は、一般の人がいいと感じるものを描いているだけであり、そこに感性に優れたアーティストの評価が含まれていないため、一般的な水準に留まる創造性にすぎないということ。

(5) 人工知能は、機械であるためそれ自身が楽しむという経験を感じることができず、一般の人を楽しませることができないということ。

問四 波線部(C)「外部を問題にするのです」とある。本文における「外部」にあたるものはどれか。最も適当なものを、次の

(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

(1) 世界の大局的知識

(2) 一元的価値観に基づく余白

(3) 予期し得ない経験

(4) 参照可能な向こう側

(5) 未知の自然科学的思考

問五 波線部④「とんでもない誤解を引き起こすことになります」とあるが、なぜ「誤解を引き起こす」のか。その説明として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

- (1) 人工知能は世界に対する正しい知識という意味では、客観的知識を指向し、自分はそれを所有していると勘違いしてしまふから。
- (2) 人工知能は世界全体に対する知識を持たないが、自分にとっての用途、評価を明確に規定することで世界像や知識を構築するから。
- (3) 人工知能は特権的に参照できる「全体」がないため想定される常識内で問題を解消しようとし、すべてのデータを自分自身の誤作動の結果として認識するから。
- (4) 人工知能は知覚したデータだけから思考し、計算するため、知覚していない場所に関して起こったことに対しては、思考できず、パニックに陥る危険性があるから。
- (5) 人工知能は人間の知性の機械化を目的とし、人間も自らを人工知能的知性だと思ってきたため、自分たちの能力を高めることが自身の人工知能化に結びついてしまふから。

問六 波線部(E)「三人称的知性」の説明として最も適当でないものはどれか。次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

- (1) 世界に対する対処の仕方として、世界はデータの集まりであると把握する認識がなく、一人称的、二人称的、そして一・五人称的な経験を持たない。
- (2) 個々の恣意的な考えから離れた知識を持っており、その知識の普遍的な妥当性を確信し、それに基づいて認識、行動する。
- (3) 持っている知識は世界にとつての真なる知識であるために、常にその正しさを前提に行動するが、しばしばその知識全体を大きく変えなければいけない状況に陥る場合がある。
- (4) 世界の真理となる全体的な知識をもつて、部分を理解し、位置を把握していく一方で、自らが知覚できないものの存在を許容することはない。
- (5) GPSによる位置情報を常に取得し、そこから得られた部分部分の知識をつなぎ合わせて現在位置を割り出しつつ、巨大雑居ビルをはじめとする世界全体の大局的な知識を構成していく。

問七 空欄

甲

に入る文章として最も適当なものを、次の(1)～(5)から一つ選び、解答欄の記号を○印で囲みなさい。

- (1) 自分自身にとつての生活世界・知識だからこそ、人工知能が自分にとつて最も重要な知能と言えるでしょう。
- (2) 世界にとつての知識とは、自然知能に基づくものであり、魚を図鑑で示すようなイメージで表現するものです。
- (3) データとして得た生活世界・知識は、その質と量を蓄積し続けることで、用意された白地図を埋めていきます。
- (4) 世間を無視し、自分の利益に沿うものだけを収集し、それによって自分の世界を作り上げていくのです。
- (5) 知覚されたデータを集め、繋ぎ合わせ、自分自身が活用できる世界として、世界を認識するのです。

問八 二重傍線部(1)「天然知能は、自分が自分らしくあることを、肯定できる、唯一の知性なのです」とある。それはどう  
いうことか。本文中の言葉を用いて、一二〇字以内で説明しなさい。

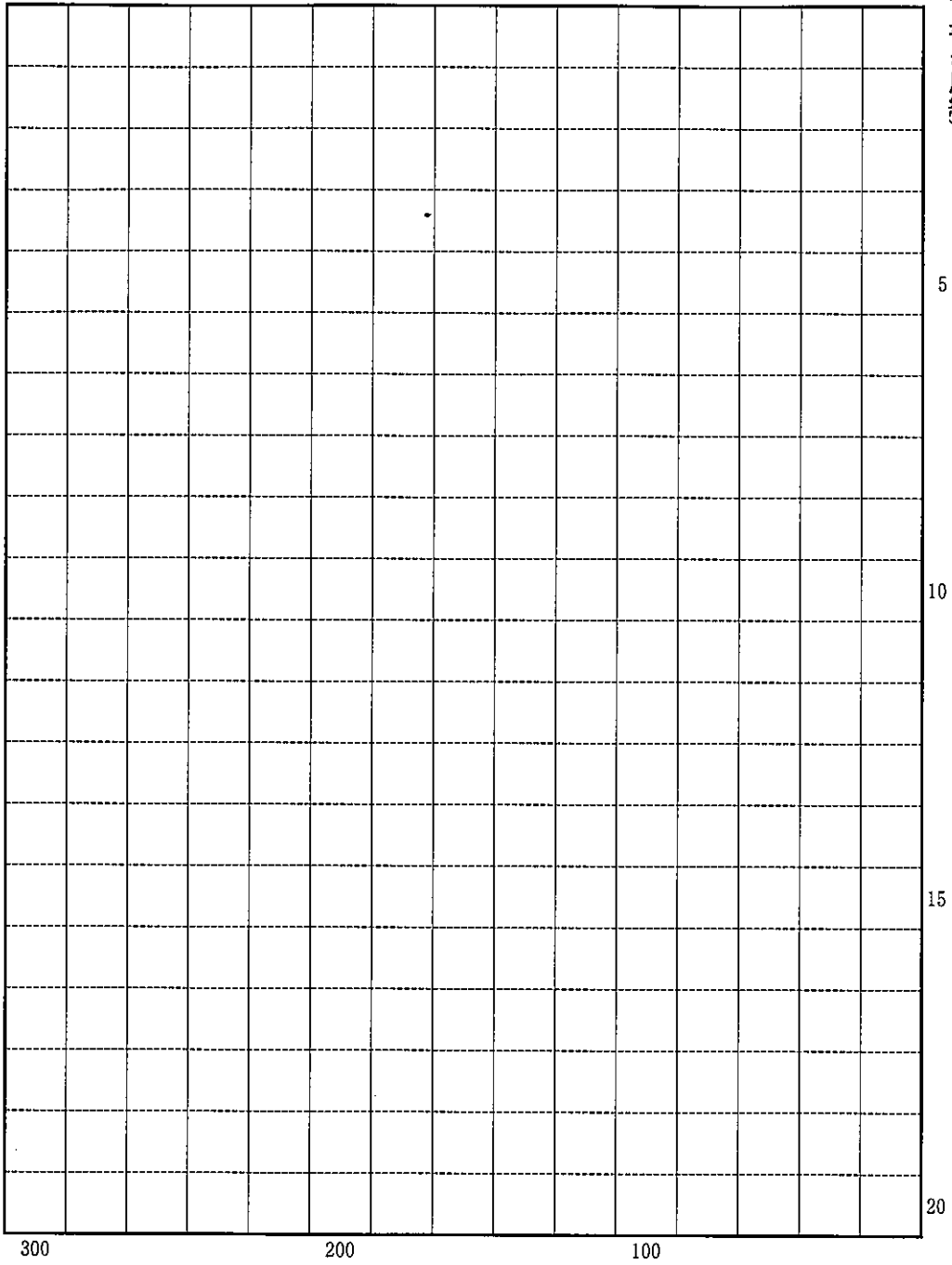
問九 二重傍線部(2)「異なる空間(七面の部屋と廊下)を、幅の広い糊代を使って重ね、とりあえず配置する」とある。それ  
はどういうことか。本文中の言葉を用いて、一二〇字以内で説明しなさい。

### 問題Ⅲ

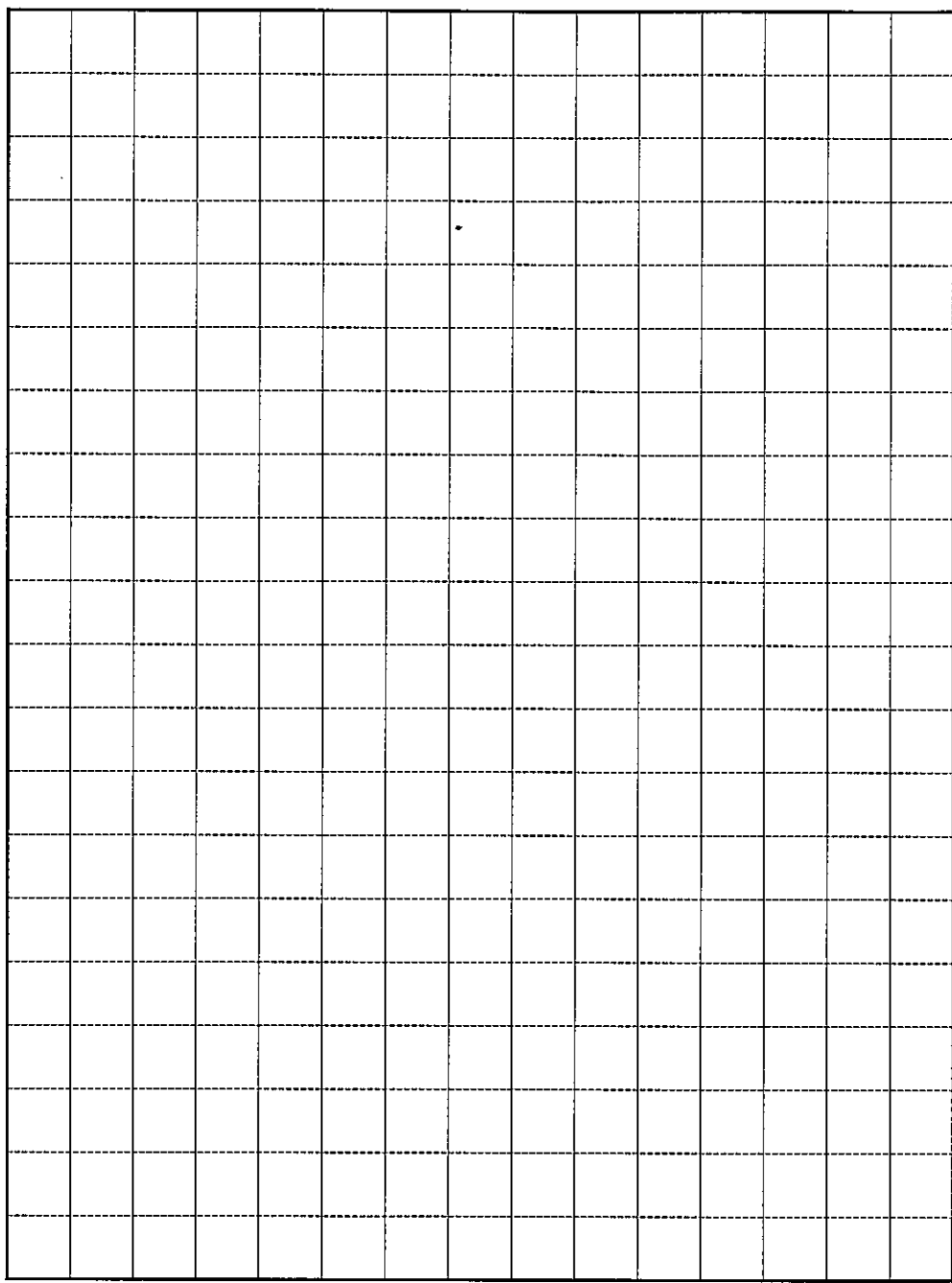
二重傍線部(3)「天然知能は、一・五人称的知性と言うことができる」とある。それはどういうことか。本文の内容を踏まえ、三〇〇字以内で説明しなさい。その際、「人工知能」と「融通無碍」という語句を必ず用いること。なお、句読点やかぎ括弧などの符号も一文字として扱いなさい。(配点25点)



(下書き用紙)



(下書き用紙)



300

200

100

5

10

15

20